

今週のメニュー

■トピックス

◇PVC News No. 82を発行します

塩化ビニル環境対策協議会

■随想

◇マリ共和国旅行記（9）－マリ共和国あれこれ－（終）

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

■編集後記

■トピックス

◇PVC News No. 82を発行します

塩化ビニル環境対策協議会

9月14日に塩化ビニル環境対策協議会（JPEC）はPVC News No.82を発行します。今号の「トップニュース」は、塩ビサイディングの北海道、千葉、沖縄、鹿児島で実施している「鉄筋コンクリート保護効果」の委託研究成果について紹介しています。

No. 82号の構成は以下の通りです。

○トップニュース

塩ビサイディングの鉄筋コンクリート保護効果

塩害、火山性ガスの害から建物を守る塩ビの力。委託研究でデータ蓄積進む

○シリーズインタビュー／さきがけびと登場

「デザインの力」を語ろう

－塩ビの世界に新風を吹き込んだハンドバッグ「skeleton」シリーズが生まれた日
ファッションデザイナー 黒河内 真衣子 氏

○インフォメーション1

「塩ビで環境対応」ロンシール工業(株)の取組み

業界初の遮熱ルーフィングでヒートアイランド対策。

屋上緑化、太陽光発電でも新機軸

○インフォメーション2

驚き！ルノン(株)のサイクル消臭壁紙

触媒機能で臭いの素を半永久的に消臭。医療、福祉の現場でも採用増加中

○ものづくりの現場から

「裁断」ひと筋。(有)紅日ビニール工業所の50年

塩ビシートから特殊素材まで。「ハサミで切れる物」なら何でも自由自在にカット

○広報だより

- ・「下水道展 '12 神戸」(7/24-27)に出展（塩化ビニル管・継手協会）
- ・リサイクルビジョン見直し
- ・PVC Design Award 2012 キックオフ！ 作品一次審査、終了

掲載記事をいくつかご紹介いたします。

「シリーズインタビュー／さきがけびと登場」には、塩ビの世界で新風を巻き起こしたデザイナーの黒河内真衣子氏にご登場願いました。塩ビシートとの出会いと、塩ビのバッグを制作することになったきっかけから完成までの思いを語っていただきました。

製作された塩ビのバッグは、香港などからも多くの注文が入るなど着実に販売を伸ばしているとのこと。塩ビをカットしたり編んだりしてデザイン性を持たせることによって、塩ビの固定したイメージを変えることが出来るとデザインの力を力説されています。

「インフォメーション」の一つ目には、塩ビの防水シートをご紹介しました。太陽からの熱を最大約70%反射し、ヒートアイランド対策に効果がある遮熱ルーフィングシートです。同社のシート防水技術は、屋上緑化や太陽光パネルの設置にも生かされています。いずれの製品も塩ビの特色である、印刷性、デザイン性、耐久性を生かした製品です。

二つ目は、塩ビの壁紙のご紹介です。触媒機能を用い、まるで空気を洗うように半永久的に部屋の空気を消臭するものです。製品化された「空気を洗う壁紙®クラフトライン」は、塩ビの印刷性やデザイン性、配色が評価され2011年度にグッドデザイン賞を受賞されました。

今号から「ものづくりの現場」として新たなコーナーをスタートします。塩ビ製品の加工・リサイクルなどを行っている現場をご紹介していきたいと思っています。

第一回は、塩ビを含めなんでもカットする(有)紅日ビニール工業所です。生地は柔らかくても硬くても上手く切るのは難しいものだそうです。研究と経験により、ハサミで切れるものならなんでも自由自在にカットできる「裁断」の技術に注目しました。

『PVCニュース』はJPECのホームページから、最新号、バックナンバー共にご覧頂けます。

<http://www.pvc.or.jp/>

ご講読を希望される方は、下記メールアドレスまで、送付先・TEL・希望部数などをご連絡下さい。

info@vec.gr.jp

■ 随想

◇マリ共和国旅行記（9）－マリ共和国あれこれ－（終）

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

さて、今回がマリ共和国旅行記の最後になります。

今回は見たり聞いたりしたことを、いくつかご紹介します。

マリ共和国には中国人が多いわけ

たまたま在マリ共和国中華人民共和国大使館の方とお話をする機会がありましたので聞いてみました。

中国とマリ共和国の間には特別な協定があります。中国国内で軽微な犯罪を犯し、有罪となった人は2つの選択肢が与えられます。

1. 確定した刑期を中国国内の刑務所で服役する。
この場合、家族との面会も可能です。
2. 中国国内の刑務所ではなく、マリ共和国に行き、中国政府が請け負っている作業（主に建築作業）に従事する。

マリ共和国で作業に従事する場合、刑期の一部が免除されます。

具体的には、仮に懲役5年の判決が出た場合、中国国内の刑務所に服役するならば刑期は5年間ですが、マリ共和国での作業に従事するならば3年間に短縮されます。マリ共和国で作業に従事する場合は中国政府が指定する宿泊所（作業員宿舎）に滞在。但し、自由に外出することはできません。もし、家族が面会に来ても会うことはできません。

マリ共和国に移送される場合の旅費は中国政府が負担しますが、刑期満了後、中国へ帰国をする旅費は自己負担となります。

実質的には、短い刑期であっても、帰国費用を稼ぐため、刑期満了後もマリ共和国で働いている中国人が多くなるというわけです。そうは言っても、1年ほどまじめに働けば中国までの旅費は稼げるようなので、トータルとしては1年減刑になるというわけです。

しかし、作業場所は砂漠のど真ん中など、かなり過酷な地帯。周りに何もないので、仮に宿泊所を脱走しても、ほぼ100%生きて帰れる見込みはないというところです。もし、私が中国で有罪になり、どちらを選択するかと聞かれたら、おとなしく中国国内で刑務所に入ります。さすがに、あの環境は辛いですから (^_^)

刑期終了後、中国に帰っても仕事もないし、世間の目もあるということで、そのままマリ共和国に残り、商売などを始める人も多いようです。この場合、マリ共和国で犯罪者にならないよう、定期的にまともな暮らしをしているかどうかの検査があるそうです。

マリ共和国で寿司

マリ共和国でフランス料理店を開いているフランス人シェフ。日本料理の知識も深く、マリ共和国にも大根があるんだよと、大根の千切り（刺身のつま）や切り干し大根（のようなもの）を食べさせてくれました。

そのシェフが、数か月前、マリ共和国初の寿司作りに挑戦したそうです。さすがに、地元の魚を使うことはできず、モーリタニアから冷凍マグロや鮭などの食材を輸入して作ったそうです。お米はマリ共和国の主食の一つでもあり、栽培も盛んですが、インディカ米なのでパラパラした炊き上がりになるため、炊き方や水加減には大分苦労をしたそうです。

マリ共和国在住の数少ない日本人の方にも集まってもらい、試食会を開き、マリ共和国の人も含め大好評だったとか。しかし、彼の店のメニューに載っていなかったのが、どうしたのと尋ねたら、「食材の輸送コストが高すぎて、1貫3,000円位になり、誰も注文してくれない (>_<) 」

う～ん、1貫3,000円の寿司ねえ (^_^; 平均年収100,000円程度の国では、誰も食べないと思う。

彼のお店のメニューに寿司はなくなりましたが「Gyoza」は載っていました。日本人のあなたにぜひ食べてほしいと言われ、注文しました。食材は全てマリ共和国のものを使っているそうですが、パリッと焦げ目のついた美味しい、本格的な焼餃子でした。ただ、日本の醤油が手に入らないということで、バルサミコソースをベースに、何とか努力をして日本の醤油に近い味にしたものしかなく、それだけが残念でした。

マリ共和国の人は写真が嫌い

いろいろな国に行きましたが、これほど写真が嫌いな人が多い国も珍しいかもしれません。政治的、軍事的に写真が撮れないという国はありましたが、マリ共和国には写真撮影禁止の場所があるとは聞いていません。

カメラを向けると、大人は一斉にどこかに行ってしまう。仕事をしている大人に写真を撮っていいかと尋ねると、必ずと言っていいほど断られます。というより、カメラを出すと、それだけで嫌がられます。

唯一撮れたのは子供の写真。さすがに、子供はカメラを出すと面白そうに寄ってきて、撮れた写真を見て大はしゃぎ。しかし、10歳位になると、みんな写真にとられるのを嫌がります。

何が原因で、何歳位から写真嫌いになるのか、結局わかりませんでした。

マリ共和国の旅はロバと共に

マリ共和国は国内交通機関があまり整備されておらず、地元の人でも分かりにくい、使いにくいという状態です。ましてや、外国人旅行者にはかなり使いにくいものです。また、レンタカー会社もなく、道路や運転事情もよく分かりません。

そこで今回の旅行で借りたのがロバ。速度は遅いですが、黙々と私と荷物を運んでくれました。さすがに、日本人がロバに乗って現れると、マリ共和国の人たちも驚いていましたが (^_^)



マリ共和国と一緒に旅したロバのドンちゃん

いつものように、取り止めのない旅行記になりましたが、日本の人はほとんど知らないマリ共和国のことが少しでもお伝えできたら幸いです。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

(おわり)

前回：[「マリ共和国旅行記」\(8\)－時間－](#)

■ 編集後記

日化協の若林さんの「マリ共和国旅行記」が今回で終わりました。日本文化との絡みもまじえていつも興味深い同国の状況を伝えていただきありがとうございました。最終回も中国の取り組みなど日本には分からない両国の関係を伝えていただきました。中国といえばパラリンピックでなんと231個のメダル(金は95個)を取りダントツ一位でした。日本は金5個で総数16個でした。この数の違いはどこからくるのか、中国に学ぶべきことが多いと思います。(ももっち)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp